

[研究ノート]

スピリチュアルに生きる人々(4)

伊田 広行

目次

「ソウル・フラワー・ユニオン」と「満月の夕」、
石露の花咲く：ハンセン病回復者、田端明さん、
ネーネーズ、
マイケル・ムーア：『恐るべき真実』

これまでに紹介した人々

スピリチュアルに生きる人々(1)

ブルーハーツ、『八日目』、安積遊歩、今里哲、キング牧師、芸術とヘルスケア協会
大学の先生を辞めてあいりん地区へ移住（遠藤比呂通）、繊細な写真家（野寺夕子）
イスラエル徴兵拒否、落書きを消す（友人）、自分を振り返る人権論（平野広朗）
ラブ・ピース・クラブ（北原みのり）、〈たましい〉に触れる子育て（友人）
僕の姿を見ればみな勇気がわくだろう（ポップ・ウィラード）
4年3ヶ月の有給休暇（坂本達）、殺すな（ソウル・フラワー・ユニオン、中川敬）
「国境なき医師団（貫戸朋子）」

スピリチュアルに生きる人々(2)

ハンセン病回復者の痛み（藤森重紀）、解放の神学（ステファニ・レナト）、非暴力主義（マハ
トマ・ガンジー）、小さな出会いの必然性（関田寛雄）、朗読劇「この子たちの夏」
チヒロ、「ハッシュ！」の朝子、労働裁判闘争（屋嘉比ふみ子、住友裁判原告）、国労の闘い、
映画『人らしく生きよう』、あなたはもっと優しくあなたはもっと強い（田中哲朗）

スピリチュアルに生きる人々(3)

アンジェリーナ・ジョリー、夜回りの水谷（水谷修）、斎藤武（チャブレン）、貧乏人大反乱集
団（松本哉）、ラコタ族からの学び、トルストイ、ヘンリー・D・ソロー、シュタイナー

☆ ☆ ☆

前号に引き続き、私の提唱する〈スピリチュアル・シングル主義〉的な生き方や思想や
行動に近いと思えるイメージと具体例を紹介していく。

「ソウル・フラワー・ユニオン」と「満月の夕」

「スピリチュアルに生きる人々(1)」で紹介したロックバンド「ソウル・フラワー・ユニオン」(中心メンバーの中川敬^{たかし}さん)を再度取り上げたい。もうずっとむかし、学生の一人が「先生と同じようなこと、中川さんってゆうてるで」と音楽雑誌を見せてくれた。そこには、「ニュー・エスト・モデル」の中川敬と「メスカリン・ドライブ」の伊丹ひでの2人による、シングル単位感覚あふれる男女論・ジェンダー論があった。男と女を逆にただけでどれだけ変わるかとか、オノ・ヨーコをジョン・レノンの付属物のように見ることのおかしさの指摘とか、曲名「RESPECTABLE SINGLES」の「シングル」は、個人、結婚していない人、結婚してもシングルでいる人などの意味を含んでおり、男社会の変革において個人が覚醒していく必要があるといったことが語られていた。

中川敬さんが『不登校新聞』(2000年7月1日号)に載せている文章には、「現実問題として階級はあるけど、裸にひんむいたら、人間なんて猿の末裔やで(笑)。そこをもっとわかるべきやと思う。警官は怖いとか、学歴が高いほうがエライとか、どっかでそういうものを信じてるから、おかしなことになる。人間みんなボチボチやで」とあった。「大学に行くのは自分の人生を決められないアホがいくところや」と思って大学に行かなかった。

「学校の教育なんて国家の調教みたいなもんやからな。行かないに越したことはないと思うで。不登校をしたということはほとんどの奴らが気付かないところを気付いたということやから、すごいことやと思う」「不登校という言い方自体、相手の手の内でしょう。いろんなところに行ったらええのや。せっかくの一度の人生なんやからね。不登校とか、ひきこもりって、すごいチャンスやとおもうで。社会のすごい速い流れから、とりあえず一歩遠ざかって、ダラダラ、のんびりやれる。そこで、いろんな人間と出会って、いろんなこと考えたらいい。いちいち、すぐ答えなんか出さなくてええのや。」

(子どもたちに言いたいことは? と聞かれて)「家出しようっていいですね。……学校もダメ、家もダメ、だから死ぬしかない……ちょっと待てや、家出があるやん。死ぬぐらいのパワーがあるんやったら、家出しよう。逆にそういう気持ちがあったら、家出しなくても、その場所で居直ることもできるしな。『世の中、何も怖いことありまへんで。大丈夫やで』って言いたい。……それとな『出る杭は打たれる』というけど、マレーシアのことわざで『出すぎた杭は打たれない』という言葉がある。それを子どもたちに言いたい。『出すぎてまえ』ってね。」

阪神大震災のとき、メディアを通じて「ソウル・フラワー・ユニオン」が神戸・長田などで出前ライブをしていることを知った。それ以前から釜ヶ崎などでライブやっているとすることも聞いていた。そこでは「若者向け」ではなく、そこにいるおっちゃん、おばちゃんたちの心に響くような昔からの歌(民謡や、戦前の歌、歌謡曲など)を歌おうという姿勢があった。

中川さんが作詞作曲した『満月の夕』^{ゆうべ}は、そうしたライブの一光景を歌ったものだという。その〈たましい〉がこもった歌は、その後多くの人に歌い継がれていく。そして私の

信頼できる友人が、「この曲いいで」とCDを貸してくれた。

『満月の夕』

風が吹く 港の方から 焼け跡を包むようにおどす風
悲しくてすべてを笑う 乾く冬の夕べ

(略)

飼い主をなくした柴が 同胞とじゃれながら車道を往く
解き放たれすべてを笑う 乾く冬の夕べ

(略)

星が降る 満月が笑う 焼け跡を包むようにおどす風
解き放たれすべてを笑う 乾く冬の夕べ

ヤサホーヤ うたが聞こえる 眠らずに朝まで踊る
ヤサホーヤ 焚き火を囲む 吐く息の白さが踊る
解き放て いのちで笑え 満月の夕

石路の花咲く：ハンセン病回復者、田端明さん¹⁾

ハンセン病回復者²⁾、田端明さんにお会いした。田端さんは、国立ハンセン病療養所、長島愛生園入所者のかたで、1938年に徴兵検査で何らかの病気のために兵役を免除されたが、それがハンセン病であり、1940年に21歳で、長島愛生園に来た（来ざるを得なかった）人である。1953年施行の悪法、新「らい予防法」の影響もあり³⁾、その後60年近くそこを

- 1) この項は、田端さんのお話に加え、田端明『石路の花咲く』（法蔵館）、寺島萬里子「つくられたハンセン病の恐怖」『DAYS JAPAN』2004年4月（創刊）号、八重樫信之「カミングアウトした元患者たち」『DAYS JAPAN』2004年4月（創刊）号、岡山県岡山県教育委員会編パンフ『ハンセン病について正しい理解のために』、国立療養所長島愛生園入所者自治会編『長島愛生園のあゆみ』、「金泰九（キムテグ）さんの『ハンセン病と人権』講演報告」（滋賀県人権センター『じんけん』2004年1月号）などを参考にまとめた。なお、お奨め文献として、ハンセン病回復者25人の証言を集めた村上絢子 [2004]『証言・ハンセン病 もう、うつむかない』（筑摩書房）、三重県人権問題研究所編『会いたかった……』（三重県発行）もある。
- 2) 「ハンセン病“元患者”」という呼称は不使用にして、「回復者」にしよう、全国ハンセン病療養所入所者協議会が確認していると後日知った。したがって、拙稿「スピリチュアルに生きる人々(2)」での記述はそうに変更したい。
- 3) ハンセン病患者は生きていくのが困難なため社寺の前で物乞いをせざるを得ない人が多く、これをみた欧米人から明治政府が非難されたために、1907年に「癩予防に関する件」という法律が制定された。これによって、定住地を持たない患者は強制収用されることになった。感染力も発病力も微弱で、かつ治療可能な病気あるのに、まるで強力な伝染病のように扱い、強力な消毒をし、祖国浄化の旗印の下「無らい県運動」を組織して患者の駆り出しを行い、偏見を育成していった。1931年に「癩予防法」を公布し、すべての患者を「癩療養所」に強制的に収容・隔離していった。また法的根拠なく、所内結婚を前提に、結婚の条件として男性には断種手術、女性には妊娠したときの墮胎を強要した（1948年、優生保護法で法制化）。患者だけでなく家族にまで断種手術を強要した医

出ることができず、今日に至っている。26歳の時には病気のために両目とも失明されている。

ハンセン病は、外形的な病変や機能障害のために加え、悪法の影響、国家の無為無策もあり、「らい病」と呼ばれ、(治る病気であるのに)不治の病と恐れられ、伝染力が非常に弱い病気であるため菌の培養が難しく、家族内で患者が発見されるなどのために遺伝病と間違っ^て思われたり、時には「らい予防法」によって強制収用されることなどから「強い感染力を持った恐ろしい伝染病」とみられ、この病に罹^{かか}った者は差別され続けてきた⁴⁾。実際は完治しておりうつるはずがないのに、その外見や偏見・無知から怖がられてきた。その家族・親戚も偏見の目で見られる⁵⁾ため、ひそかに患者を家から出し、患者を戸籍から抹消したり、死んだことにしたり、名前を変えるように強制したりし、患者(回復者)は二度と故郷に帰ることができなかつた。帰る故郷を奪われたのだ。手紙も送れなかつた。死んで遺族が御骨を引き取りにきたときも帰りの船から御骨を入れた箱が海に投げ捨てられたという。

2001年、ハンセン病訴訟勝訴の後、療養所を出るものに対して経済支援がなされることになり、一部の者は社会復帰したが、多くは家族の元には帰れなかつた。死んだことになっているから帰ってこないでくれと言われたものもいたし、家から一歩も外に出してもらえないようになった回復者もいた。

そのような環境の中に田端さんも置かれ、その激烈な人生体験を踏まえて、田端さんは心の叫びや慟哭の詩歌を作った。またその絶望の淵で『歎異抄』と出会い、その喜び、世界観も詩歌で表現された。64年ぶりに故郷^{ふるさと}に一時帰られたときの喜びや感想も表現された。それはスピリチュアルなものという他にないと私には感じられた。その著書『石路の花咲く』に収められているその作品のいくつかをここで紹介しておこう。

者もいた。予算不足、職員不足を補うため、患者が所内のさまざまな労働に駆り出され、園長に反抗的な者とみなされたものは監房に入れられるなど管理支配体制がとられた。栄養失調、過酷労働などにより病気になるものも増え、死亡者も多かつた。法律の付帯決議に「近い将来、病名の変更を期す」とあつたが、法の廃止まで40年間そのままであつた。

戦後、全国の療養所で患者の待遇改善闘争が組織され、1943年のプロミンという薬でハンセン病が簡単に治る病気になって、「らい予防法」の改正・廃止が求められたが、政府は当事者運動を無視し、逆にこの強制隔離絶滅政策を存続させる選択を行つた。それが1953年施行の悪法、新「らい予防法」である。「癩」の漢字がひらがなになつただけと言われている。国際的には開放政策が主流となつていった中での日本のこの対応は批判されたが、政府は完治する病気だと広く国民に知らせるところか、強制隔離を続けて逆のイメージを定着させたといわれている。その後1996年までこの悪法を変えることがなかつた。元患者たちは裁判を起こし、2001年5月、ハンセン病訴訟の熊本訴訟で、損害賠償を認め、「らい予防法」自体が人権侵害で違憲(遅くとも1961年以降予防法は違憲)とし、それを改めなかつた国の過失(国会議員の立法不作為)も認められた。

- 4) 1873年、ノルウェーのハンセン氏が病原菌を発見して慢性感染症とわかつた。しかし、感染力が弱く、感染が起こるのは免疫力の低い乳幼児が多く、潜伏期間も長いために、長らく遺伝病と見られていた。
- 5) その家族・親戚まで社会からかわりを拒絶され、結婚も就職も困難にされた。

何一つできぬ病に伏せてな^{なにゆえ}お何故に生きていかねばならぬ

形なき水に^{こだま}木霊す魂の叫びが響く波の間に間に

ただ人のお世話になりて生きている我が人生の価値観を問う

舌読^{ぜつどく}の点字^{きょうてん}経典血に染めて我が人生を探る

いづどこでいかなる場所におかれてもいつも真ん中光が包む

そよそよと風が光をなでていく今の命に涙こぼれる

閉ざされし心の闇に御仏の光^{しょうじ}届いて生路ひらかる

我が為に残せし母の文^{ふみ}読めば心は震え涙あふるる

あれこれとなんじゃかんじゃと言うけれどとどのつまりはゼロの私

人生の苦悩に目覚め生かされて生きる^{いのち}生命の尊かりけり

大いなる^{いのち}生命の中にある私生かされ生きる今も生かされ

眼を病みて^{いのち}生命絶とうとせし^{われ}我が今許されて生きる喜び

失明の重荷を今日も持ち歩き心の窓を探して回る

わからないわからないから問いかける我が人生の未来^{いずこ}は何処

生かされて生きる命と今朝の蟻命はひとつ共に生かさるる

一匹の蚊に血を吸われ腹立てている人間のあさましさかな

^{ふるさと}故里の空気の中にある匂い我れ賜りし乳房の匂い

田端さんにお話を聞いたとき、私は「なぜハンセン病回復者の方々は、それほどまでにくたましいのこもった言葉^{つむ}を紡げるのか」と質問した。それに対して田端さんは次のように語られた。

「私は無理なく本当に、ハンセン病になってよかったな、失明してよかったなと思うようになりました。そうなったおかげで多くの人とのご縁をいただくようになりました。失明したおかげで、もう一度人生を考えてみよう、生きるとは、死ぬとは、命とは何かを考えてみようという気持ちになれました。どん底に落ちてはじめて、差し込んできた光をみることができました。もしどん底に落ちなければその光を見ることはできなかったでしょう。流してきた涙が、私に真実の生命をみせてくれました。死まで考えながら死ななかったのは、私の力でなく、私の周りの人々が私を生かしてくださったからです。私にさまざまな試練を与えてくださった。その中で、『神仏、人、自然』と出会い、魂を磨くことができたのです。」

また次のようなことも語られた。

「人生には、“上り坂”，“下り坂”，“まさかの坂”があります。意識するしないにかかわらずこの3つの坂を涙とともに通っていくのが人生です。そうした厳しいハードルを越えていくところに未来があり、また自己というものに気づかせていただく路があるのです。」

「今の社会では、連帯の心が失われています。誰かが困っていれば助ける風潮が以前はあったのに、今は打算的になり、物質的豊かさばかりに目を奪われています。教育も含め、枝先ばかりを飾っており、根っこを放置してしまっています。『エライ人になる必要はありません。少しでも真実に目を向けて人生を送ること。それが世の中も明るくすることです』ということ子どもに教えなくてははいけません。だが今はエゴイズムな人間を作る社会になってしまっています。」と。

『石路の花咲く』の中でも次のように語られている。

「一度は死を覚悟した私が母の慈悲により生かされ、療養を続けることができています。私の生命は、私一人のためにあるのではなかったのです。光を失いながらも、生きる意味を問い、悩み、生きる価値について考えることができる。奈落の底に落ちたとき、生と死の、その人間存在のありようの深さを、この、光の届かぬ^{まぶた}奥に見せていただくことができました。深い感謝を覚えます。そして生かされているのなら、珠玉のような人生を生きていきたいと思うのです。」

こうしたことをよくある言い方ととるのはたやすい。しかしそれは逃げている。その表層で捉えるのでなく、ホンモノの深さで捉えるならば、それが伝えようとしていることは、どこまでも深い。

「人は誰でも、この世に生を受けた瞬間から、人生成就の旅に出ます」という言葉を、表層レベルでなく、本当に生き方の中で実践されている人の言葉は重い。スピリチュアルな人とは、このような人をいう。

ネーネーズ

友人にネーネーズの解散ライブのCDを聞かせてもらった。ラストということもあるだろう。その歌声、言葉に〈たましい〉をととても感じた。決して、今流行の流^{はやり}れではない。だがネーネーズは多くの人々をひきつけてきた。昔はちゃんと聞いていなかったが、今、とても染みてくる人たちの声だ。

『黄金の花』 (岡本おさみ作詞)

黄金の花が咲くという 噂で夢を描いたの
家族を故郷^{ふるさと}に 故郷に 置いて泣き泣き、出てきたの

素朴で純情な人たちよ きれいな目をした人たちよ
黄金でその目を汚^{よご}さないで 黄金の花はいつか散る

楽しく仕事をしてますか 寿司や納豆食べてますか
病気のお金はありますか 悪い人には気をつけて

素朴で純情な人たちよ ことばの違う人たちよ
黄金で心を汚^{よご}さないで 黄金の花はいつか散る

あなたの生まれたこの国に どんな花が咲きますか
神が与えた宝物 それはお金じゃないはずよ

素朴で純情な人たちよ ほんとの花を咲かせてね
黄金で心を捨てないで 黄金の花はいつか散る

素朴で純情な人たちよ 体だけは御大事に
黄金で心を捨てないで 黄金の花はいつか散る
黄金を捨てないで ほんとの花を咲かせてね

マイケル・ムーア：『恐るべき真実』

ブッシュに代表される米国の現実。しかし、それだけではない。ユニークな闘い方をする人がいる。それが映画『ボーリング・フォー・コロンバイン』『ロジャー&ミー』『ザ・ビッグ・ワン』を作ったマイケル・ムーアだ⁶⁾。皮肉たっぷり、ブラックな、ユーモラスな表現スタイル。保守派が眉をしかめる。相手にしたくない。反論しにくい。そんなスタ

6) 最新作『華氏 911』がカンヌ映画祭でパルムドール（最高賞）をとった。彼の本としては、『アホでマスケなアメリカ白人』、『おい、ブッシュ、世界を返せ!』『アホの壁 in USA』などがある。

イルは、ユニークで創造的だ。私もそのようになりたいと思う。

その彼が、作ったテレビ番組が『Awful Truth 恐るべき真実』である。あるときは、米国で警官がサイフや携帯電話を持っていた黒人を拳銃を持っていてと勘違いして射殺してしまっていることが多い現実を皮肉って、彼は街頭でマイクを持って道行く黒人の人たちに呼びかける。「危ないから黒いサイフをここに捨ててオレンジ色のサイフと交換してください」と。拳銃で撃たれた跡のシールを額に貼って道端に倒れるパフォーマンスをする。黒人は道を歩くとき両手を常に挙げて歩くようにしようというって実際集まってきた警官の前で両手を上げさせたり、両手を挙げたように見える「人形の手」を体につけさせる。財布を持っている黒人たちに、「サイフを置いて両手を上げて後ろに下がれ」と命令し、そうさせる。集まってきた警官にカメラを向け、財布が何に見えるかとたずねる。白人が持っているときには携帯電話、黒人が持つと拳銃に見えるという実例をみなの前でやり、マジックだと叫ぶ。集めた黒い財布を警察署の前にぶちまける。薬物で幻覚が見える人に、簡単に幻覚を見るにはどうしたらいいか知ってるかいとたずね、答えは黒人の前に立つことだよと教える。そういう場面をつないで番組を作る。

笑える。何事かと集まってきた警官たちは、まともに相手にしては負けだし、そうかといって放置もできないしと、戸惑う。そこをカメラがとらえる。シナリオに基づく虚構や仕掛けと、現実を映すドキュメンタリーが混ざり合う。

同じようなスタイルで、死刑囚に対する死刑執行件数が高いテキサス州、その州知事のジョージ・ブッシュ（現在大統領になっている）を、スポーツゲームでの勝利監督になぞらえてテレビ番組的ナレーションを仰々しく付随させて皮肉る。同じくフロリダ州知事であるブッシュ弟（ジェフ）と比べ、テキサス・ブッシュのほうが監督としてすごい、やったー、両州の間でさらに差は開いた、スコアは117対2だとテキサスの執行件数を得点に見立ててたたえる。ブッシュ弟は電気椅子を改良して、兄に追いつこうとするが、まだまだだ。テキサスでの死刑執行場の前には、死刑制度賛成のサポーターたちが大勢集まっている。そこにマイケル・ムーアたちの撮影チームがチアガールを引き連れて合流し、死刑制度賛成サポーターたちと盛り上がる。何も知らないサポーターたちはインタビューに嬉々として応じ、悪いやつがいなくなるとスカッとするとか、死刑にしないのは甘すぎるとかカメラの前で答える。

そんな感じの作品だ。その他、選挙に選びたい候補者がいないことを皮肉って「フェイスという樹」を立候補させたり、大統領選を皮肉るキャンペーンをしたり、銃のぬいぐるみを着て、拳銃規制に反対する人たちの場所にいたり、子どもたちに銃の「楽しさ」を教えたりする。とにかく笑えるアイデア満載だ。その作品の力は、真正面からのマジメなものとはまたちがって、多くの人を混乱させ、考えさせ、ウケるといったものだ。

（続く）